

奉納剣道大会

賑行事として、福岡県剣道連盟盟僚の支部の主催により行なわれているもので試合法は、小学、初級、少年、高中、中学、高校、大学、一般の五つにわたるの団体勝ち抜きである。

奉納吟詠大会

奉納者は北九州八幡区に本部を置く鶴ヶ崎吟詠会（会長河野鶴州）で、百八十名が宗像大社の御神徳を称え、各題に日頃の成果を披露した。

当日午前十時、拝殿に於て会長代理伊豆丸郷州氏が「宗像三神」を堂々と獻吟し、玉串拝礼の后会場にて大歓迎に移った。老若男女の会衆が體面に力を入れた歌詠すれば、参拝者もその美声につられ三々五

天神の裁き

わが国は神州と名乗る通り、さすがに全国津々浦々に至るまで神社の数はまことに多い。その中であつて、そこに種々のお祭行事が育つられたと稱する。

残筆しがらみ草紙

罪なくし

て配所の月を眺めたいなど望んだ者もあるが、道真公は項むところか悲願失ふの太宰府で配所の月

れず、太宰府と北野の天満宮について信仰の特性など述べることにした。

南坊流
献茶奉納式

春季茶會第二目的の月二日午後一時、當天大社殿に於いて「南流」時、小方社一（宗像南郷、小方校師匠）による献茶奉納の儀が静寂厳肅裏に進行された。同社中は例の行事として、當天大社の会祭よりし懸念を行い、御神徳稱へ日頃の桔梗の成果を御神前に披露し、社の隆盛と一門の無病無災を祈念する。本年、大社殿に特別茶を設けて小方師匠直々の御献前による献茶が、同各師匠、同社中（作法生多数列席し、南流流独特の作法により蒸がな、南流された。當日は小春日和とな、時候にも恵まれて終日参拝者の絶えなく、社頭では終日参拝者の絶えなく、無く、折々、献茶の神事が行われていた。来を定め敬服の服をして、しばしの間、足をとめて散策の境地に心を打たれていた。また、式典終了、参参にお茶を饗するお膳に、たの御物交茶に、桜の花びらが舞い落ち、後の春潮漫の風情をかもしだした。

【お知らせ】

一般参拝中止について

来る五月二十七日、沖ノ島鎮座の像大付津津宮に於て、日本海軍戦記念日を以て、國家護衛祈念の現地参祭を齎行いたす。

毎海上保安庁の御厚恩によ、大島から巡視艇、伊東艦、海上十九号小艇、伊東艦、の孤獨、沖ノ島に覆り、津津宮で祭を齎行致しております。この祭には、特別希望者の方々の外には特別に希望者の参祭を受付けておりますが、本年度は各位御承知の如く世

界各國海軍規則問題等より海上保安庁に於ては、その対策等、専任をされて有り、例年の如く便宜供与國に非ざるしで有り。

故に大付と致しましては諸般問題等を考慮し本年度は當大職員のみ渡島の方と致します。参拝希望の方の位には大受申わけなく存しますが石事情を以てのみ、宜しく御了承願ひます。

宗像大社々務局 各位

春祭齋行

去る四月三日、宗像町大字主丸
許斐山（標高二七一米）の頂に鐘
座する王子神社の例祭が斎行され

神湊

(6)

楠 早鳥作
福田 長庵画

絶海中津（その二）

絶海は阿奈が去つた闇を凝視して、闇の中から様々の想念が浮んで来てゐた。汝郎の左胸に刺さつて居る刀の柄に、その名を記した印の刻痕が目にしみて、えい、とこも知つた。その時から絶海は未だ顔もあわなともないの男に、宿命的と言へるやうな、交際のまよひなり、苦悶と憂鬱を包んで居る。

を出た竜潭寺に引沙跡（星）を何處のまにか彼處周間は倉の人物がけり卷いてゐた。自らに對する悪感が曲折してゐたのか、或るものゝ思ふに、

頭へにかかれは三才であつた
心と申す中つければ

夢窓疎石の味で敵しい修の
日々が、夢窓の没後、建仁寺の
のどが、夢窓の受戒し僧となつた
山徳良、大林清建、建仁寺
を越した十二年の歲月、のち鶴龜
な為かと思ひ、急に幕府書狀
た危悪感とはちと質の興た怖

を明朝へ願ひて許可がおりな
い、文人仲間を通じて理田調べ
る、平筆談に關するところ疑が
かかてゐるに一つ。あやう明國
さ、太祖の非情を貶められて
いた。彼父子祖のものに送ら
なれば、國が危か。明朝も強大
の、太祖の非情を貶められて
いた。この惡念を龜庵は心中で苦化

に起き天護法欣
の筈に入り、先
羅義堂周信等と
交わり詩文をも
つて声名を博し、関東管領家
か重んぜられ
た。その後渡
海明して詩僧
として有名であ
る。季潔防犯は宗
厚通うけ、宗
厚通うけ、宗
厚通うけ、宗

人牛俱忘
凡情脫落聖意皆空中有佛
處不用愁遊無佛處急須
走過兩頭不著千眼難窺
百鳥銜花一場快活頌曰
鞭索人牛盡屬空整天索
麻任難通紅爐焰上爭容
雪到北方能合祖家

れを抱いて
だまされ
だけに羅義が
張士誠の遺児
など騒々しく
と言のをう
と罵ろうと思
つていた義經に
いくその危
機感を説いて
も人知洪武
は死んだ今は
二代帝の時
代だ」と意に
介す様子も
ない。

絶海の孤桐
にはそれに対

わがわがつかつたのか

あの政治といふ魔物のものに輸入
の統治はあれはしかと牡丹の名
を討てた。そして、その名を以て
所て有名な盛寧寺文人仲間へ遊
びに誘ひだした。その時、張士誠
は心算のことであつた。李濬陽が
らさわれるまに三四回に入りに難
識を知りてすこしてゐると突然、声
を起し、張士誠の名字を呼んで、
「おれは日本にゐるを諷されてゐ
る、がその消息知らぬか」と問う
た。母国に在る間そのまゝとな
つて居てもよいと思ふが、李濬陽は
話をは聞いた者がないが、必要なる調
へて、このことが頭にあつ
た。きしも隆盛を勝る太祖洪武の
治世にあつても、これに反する一
派があつたに生じてゐることを
知つた。かつて張士誠が呉國

を奪ひ本國政府が召喚せる形を
とつた。そんな自由云々濃濃が
使者となり絶海へ参内するのを告
げさせた。召に太祖拝謁する
べく、先ず津要についての問が
あつた。張士誠はそれを見て、詩
一首を書き、それを贈つた。上は
飛鴻峰前、下は福樹云々の賦
に、太祖自ら和歌を賜つた。

絶海の備前の計がおりたるのは
その数日后であつた。その後、彼
は一人自らの志により備前に出
たといふが、暗示したが、數
年後府を訪れ、近來省のものから
かて交友のあつた李濬陽を始め
反祖服の人物を、ことごと刑に
処せられたことを知り慄然した。
絶海はそれ以後、歴代に率直
の遺児の足りを調べた。それに
より筑前宗像で没したのはやはりで

められていた。
阿吉の知らせを聞くまではさし
聞きなかつた相手が、現実のも
のになつて目の前に大きく立ちふ
さがるのを感た。先刻の部屋
でやつてからのつ二一の筆情動
作が目についた。大内訃の死を
胸に秘して泰然と待し、凡そ
要を離れて、幕府にのみ身を辞
していつた體態はどういふ難堪
なものであつた。

將軍を動かさう、絶海は周囲に
思ひ眼を覗んだ。

☆ ☆

する處もい

